

サブヒ・アフメドフ  
歴史学博士

## アゼルバイジャン共和国の国旗

アゼルバイジャンの国旗はただ普遍的な旗ではない。それは我々の国家体制、独立性の象徴である。従い、国民の皆さんにはこれを理解し、評価していただきたい。国旗に対する愛が母国への愛に等しくならざるを得ない。

ヘイダル・アリエフ



モミネ・ハトゥン陵の壁での真ん中に配置されている「アッラー」という献詞のある八芒星の描写（12世紀、ナヒチェバン）

如何なる国家の優先課題の一つは、その象徴を可決することである。それは、その国家の体制の外面的なシンボ

ルとなり、従って国の歴史経験及び伝承に基づいて創る必要がある。歴史的な発展とともに国家体制の象徴が変わっていくだろう。「アゼルバイジャン共和国のヘイダル・アリエフ大統領のアゼルバイジャン国民への新2001年、新世紀、第三ミレニアムを祝賀するアピール」の中では、アゼルバイジャン国家体制の現代的な象徴が議会、政府、軍隊、通貨、国旗、紋章、国家、憲法であると指摘されており、それは国家体制の象徴に対する現世界のアプローチに依拠しているとのことである。

人類は文化上、そして歴史上はシンボルを抜きにして想像し兼ねる。それらは、グ

ローバル化した普遍主義が必要となるところ、例えば宗教や国家体制に関する課題で最大限に使用される。シンボルは、合理的な意味性を簡潔に表現する必要となる時に使われる。古代は、人々は、超自然的な力、祖先の魂などを信仰し、それらの信念は、具体的かつ明瞭な形象に組込まれていた。神聖なる動物の画像が部族のみに見えるように木に置かれていた。それらの画像は、ますます民族の徴に変わっていき、そんな風にシンボルが生まれたのである。シンボルは、人間の知識の定型化された徴を使って確定及び反映した集中的、抽象的な形である<sup>1</sup>。シンボルは、個々のオブジェクトのフォーム、



またはそれらの組み合わせとして存在しうる。現代社会では、言葉のように重要で意義深いものであり、それらはすぐに認識され、言語的な障壁を克服しようとしている。シンボルは、様々なレベルで機能化されている。それは、一部分が或る国や文化の中だけでは値がつけられている他方で、異なる場所では完全に反対の意味を持つかもしれない。シンボルは、それらの時代・文化の信念や社会的な習慣を表している。シンボルを借り入れすることが隣国との貿易、文化的な（しばしば宗教的）関係、征服を通じて行われていた。

シンボルはよく旗印で現れ、それは多くの人々に影



船首に八芒星が描かれた舟（ゴブスタン、紀元前1万2千年前）

響を与え得る高い旗竿と幅広い面のある要素である。旗印は、特定の社会的・政治的システムで生じ、その基本的な考え方を吸収する傾向である。旗の色、そしてその柄のシンボルがアイデアを表すようなシンボルである。旗は、

その所有者の見通しやイデオロギーを明らかにし、宣言の一種として見なすことができる。様々な民族の歴史及び現代では、人々の統一性を象徴化する要素としての意味を過大評価しづらい。旗は、統一性のシンボルであり、特別な



アゼルバイジャン民主共和国の国旗・1918年6月21日付け



アゼルバイジャン民主共和国・1918年11月9日付け

聖なるものとして見なされ、人々はそれを持って戦闘に行き、死亡した。旗のシンボルとエンブレムは過去を反映しているか、あるいは将来への欲求を示している。ところが、いずれにせよ各々の旗はそれに移されている彩色及び柄を使ってその国の運命を語っているのである。時にしては民族らが独立を失ったり、国家体制を奪われたりするだろうが、その民族の記憶に残るのが旗の標章及び柄の帛政プロセスについての思い出な

のである。

最初の国家が古代東洋において生じ、また最初の旗もここにてできた。古代メソポタミアでは旗は軍旗としてでき、太陽円盤の形での青銅や黄金の柄頭が旗葉に載せられていた。旗の最古の画像は、エジプトのファラオラムセス三世(紀元前1204頃-紀元前1173年)の時代の壁画で見られる旗葉の旗である<sup>2</sup>。旗に関する最古の記録文書は、紀元前1122年(周皇帝の治世)に遡<sup>3</sup>。

アゼルバイジャンでのシンボル史も古代にまで遡る。アゼルバイジャンの国立博物館のコレクションには太陽と鹿の画像があった唯一な旗(紀元三千年紀後一紀元二世紀後半)が保管されている<sup>4</sup>。

旗では、シンボルは色や標、絵や上書きを通じて表わされている。紋章学では、色が大きな役割を果たしており、様々な標の形の数を大いに増やし、それぞれの模様を容易に区別し、複数の組み合わせを作り、あらゆる色で特定の意味がつけられるのである。全ての国は、自国の主な特徴を表わす機会を与える歴史上定まった色合いを使ってそれらの国家的・政治的・イデオロギー的な立場を表明している。それぞれの民族は、各色をそれなりに解釈するから、色の研究はその人々の伝統や考え方に基づいて進める必要がある。例を挙げてみると、喪の色は、ヨーロッパでは黒、中国では白となる<sup>5</sup>。一方で、紋章学的な色の一般論もある。例えば、金色は主導権、偉大さ、富のように、銀色は知恵、清潔さのように、赤色は力、勇気、愛のように、青色は名誉、忠誠心、尊敬のように、緑色は自由、希望、健康のように、黒色は忠実さ、謙遜、死のように連想されている<sup>6</sup>。

多くの民族には、互いに遠く離れて住んでいる人々にも、似たようなシンボルを持っている。ライオンは力、寛大さ、勇敢さ、権威として、馬は獅子の勇気、鷹の視力、牛の力、鹿の速さ、狐の巧妙さとして、牛は豊穰、繁栄と

1918年11月9日付け、アゼルバイジャン共和国議会の議事録より



して、鷹は権威、洞察力として、魚は警戒心として、蛇は永遠さとして、樅の木は強さ、パワーとして、ローレルは名誉として、太陽は富、充実さとして見られる<sup>7</sup>。

このように、様々な色やシンボルの組み合わせは、旗の最も主要な役割—国の紋章—として果たされる。

周知のとおり、ロシア帝国の崩壊時において、アゼルバイジャン人は国家の独立性を取り戻せる機会が与えられた。1918年5月28日にアゼルバイジャン国民評議会は独立宣言を採択した。アゼルバイジャン民主共和国の初歩的な活動の一つは、国家体制のアトリビュートを採用することで会った。旗の最初の形としてはオスマン帝国の国旗が

取り上げられた。1918年6月21日、アゼルバイジャン民主共和国の白い三日月及び白い八芒星のある国旗が採択された。オスマン帝国の旗は5芒星が描かれていた。

国家体制の基盤強化、国家的なシンボルの研究は、アゼルバイジャン民主共和国の国旗を変更する問題に導いた。新しい旗は、三つの概念を表わさなければいけなかったのである。それは、チュルク主義、イスラム教及びプログレスへの志向のアイデアであった。それらのアイデアの形成には、有名な哲学者のジャマレッディン・アフガニ氏(1838-1897)の書籍が影響したことを言っておきたい。アフガニ氏は、『国家統一性の哲学及び宗教団体の現実』

や『イスラムの統一性』という著書では、イスラム圏の民族らは宗教的・国家的な統一及びヨーロッパの国々の進歩的な慣習を研究した上で進歩ができることを明らかにしていた。アフガニ氏の哲学は、イスマイル・ベイ・ガスプリンスキ氏、ジャ・ゴカルupp氏、アリ・ベイ・ヒュセインザデ氏、アフメド・ベイ・アガエフ氏、ムハムメド・アミン・ラスルザデ氏のような思想家の書籍の基盤となり、それらの「民族主義、イスラム主義、近代性」の概念として形成されたのである<sup>8</sup>。1914年にバクーの「ディリリック」という雑誌に於いて出版されたM.ラスルザデ氏の記事では、国家の復興には民族自我意識、宗教、言語、歴史、近代性及びプログレスを表わすアトリビュートが不可欠であると指摘されている<sup>9</sup>。

1918年11月9日にアゼルバイジャン民主共和国の総理大臣であったファタリ・ハン・ホイスキ氏の報告書うに基づいて新しい国旗の法案が承認された。今回の国旗は、横の青・赤・緑の線、また赤線の真ん中に示されている白い三日月と八芒星であった<sup>10</sup>。F.ホイスキ氏によると、三日月はイスラム教をイメージし、八芒星は「アゼルバイジャン」の国名をアラビア語のアルファベットの8つの文字として象徴していた<sup>11</sup>。研究者によると、八芒星は、国の比喩的な名前—「火の国」—をアラビア語でのスペル象徴として解釈できるとのこと。「アゼルバイジャン」という正式な新聞には「アゼルバイジ

「アゼルバイジャンの国旗」といった記事が載せられ、旗の新しい形に関して説明があった<sup>12</sup>。1918年12月7日に新国旗は、議会の建物の上に掲揚された。M. ラスルザデ氏は、「この三色の旗がアゼルバイジャン国民評議会より採択された独立を象徴し、テュルクの自由、イスラム文化、近代性を表わし、永遠に翻る」と発言した<sup>13</sup>。1918年12月10日付けの「アゼルバイジャン」新聞では、アゼルバイジャン民主共和国の三色の国旗が「テュルク民族文化、現代西洋民主主義及びイスラム文明のシンボル」であると書かれていた<sup>14</sup>。アゼルバイジャン共和国の国歌の顕著な作曲家と音楽学者、ウゼイル・ハジベヨフ氏が「アゼルバイジャン共和国は、健全な国民意識とテュルク民族意識に基づいてでき、当時アゼルバイジャンは新しい社会を創造し、西洋の考え方によって行動しようと努力し、我々の旗の三色がそれらの要素を象徴化している」と記していた<sup>15</sup>。1919年5月28日付け「アゼルバイジャン」新聞にウゼイル・ハジベヨフ氏の「1年間」という記事が出版され、そこには「我々の旗は、その青がテュルク民族主義の色、緑がイスラム主義の色、赤がプロGRESS及び文化の色のよう意味づけられている」と指摘する。

アゼルバイジャンでの赤色の旗については、アラブ征服者に反する解放闘争を率いたフラミットの八世紀―九世紀の記録で書かれている。それらは、ペルシアの記録には「スルハレム」（赤い旗を持

っている人たち）、アラブの記録には「ムハッミル」（赤い色を来ている人たち）のような言い方がある。そのために、アゼルバイジャンで拝火教の復旧を守ろうと努めていたフラミットが赤い色を旗と服の主な色として選んだのである。しかしながら、赤色はただ拝火教及び闘争のシンボルばかりとして見なすのが正しくないのではなかろうか。古い細密画や織物や絨毯を見



金の女性耳輪（19世紀、アゼルバイジャンの国立歴史博物館）

直してみれば、赤色は、アゼルバイジャンで人気のある色の一つであり、美しさの意味として認識されたことが分かるだろう。赤色は、多くの意味づけがあり、20世紀頭のアゼルバイジャン思想家の著書に於いてプロGRESSの色として描写されている<sup>16</sup>。

赤い色とは対照に、緑色は善を表わす。それは植物及び新しい命の色であり、喜び及び保護観を与える。青色は、テュルク主義の色として古代のテュルク民族の空や天の神―タヌリ（テングリ）―へ

の信仰と結び付けられ、「ギョクテュルク」（青テュルク）に由来される。緑色は、十九世紀後半に東洋でも西洋でもイスラムの色として認識されるようになってき、青色はテュルク主義として見られていた。上記をふまえて、アゼルバイジャンの国旗のために青、赤、緑が選ばれたわけである。ソビエトの時代にアゼルバイジャン・ソビエト社会主義共和国の旗には別の意味で赤と青の線が守られたのだが、緑は、間違いなくイスラムの象徴として理解されていた理由で、除かれたのである。

現代の紋章学では赤い色が力とパワー、青い色が名誉と尊厳、緑色が自由、希望と健康を象徴化している。

アゼルバイジャンの伝統的な工芸品では、赤と緑のコンビネーションが広く利用されている<sup>17</sup>。例えば、宝石の青色、赤色と緑色の組み合わせは、16世紀のタブリーズ流ヘルメット、16世紀のシャマヒー流の盾、16世紀の鋼ヴァンブレイス、17世紀のタブリーズ流の革の盾、またモスクワ国立兵器庫に保管されている17世紀の鎚矛、ボリス・ゴドゥノフにサファヴィー朝のシャーより贈られたタブリーズ生産の王座等々で見られる<sup>18</sup>。アゼルバイジャン国立博物館では青、赤及び緑の宝石や三日月と星のように飾られた宝石製品が大量である。また、絨毯、刺繍、そして建築物でさえそれらの色の組み合わせが見られる。

ヨーロッパの歴史学では、当時三日月がビザンチンのシ

ンボルあり、トルコ人によるコンスタンティノープルの占領後にイスラム教徒に借用されたとのこと<sup>19</sup>。ところが、研究者によれば、古代東洋では三日月及び八芒星がシンボルとして使われていた。古代エジプト人は、三日月をイシス女神とハトホル女神のシンボルとして使っており、また繁栄及び成長のシンボルとしても考えられていた。古代エジプトでは月の神が頭には三日月と月と一緒に表現されていた。古代メソポタミアでは、三日月と星はイシュタル女神の象徴であった。サーサーン朝帝国では三日月と星の描写が殆ど全ての統治者のコインで見かけられる。アラブのカリフの旗で三日月の絵が徐々にイスラム教の一般的な象徴として理解されるようになっていく。十字軍の時代からは、三日月のイメージが明らかにイスラム教の象徴として把握されていく<sup>20</sup>。星は、多くの文化の中で普及されたシンボルとなっている。星は昔から永遠のシンボルとなり、また大きな意欲と理想を象徴化していた。星は、幸福と指針のエンブレムである。そして、「8」という数字が東洋では聖礼の意味を持ち、テュルクのウマイ女神の絵が常に8つのスポークがある輪に配置されていた。八芒星は、メソポタミアからオーストラリアにかけて金星のシンボルとして幅広く見られていた。イスラム教では、三日月が神性及び最高権力の重要なシンボルとしてされてきた。イスラムの伝承によると、天国の第八段階（「ジャ

ニヤット・ウリ・アリ」）が光でできている。

アゼルバイジャンで三日月及び八芒星はシンボルとして何千年以上も利用されている。例を挙げてみると、青銅器時代の土器の多くには三日月のような形をしている角の動物（鹿、牛、ヤギ）が描かれている。研究者によると、その角は月のシンボルとされていたということである。アゼルバイジャン国立博物館のコレクションでは2つ八芒星の絵がある銅の軍旗（紀元前三千年—二千年）が保管されている。同様な星の絵はゴブスタンでの岩石線画で見られる船首にもある。また、銅の香炉（七世紀、エルミタージュ美術館で保管）コーカサスアルバニの統治者、ジャヴァンシル（629-681）の絵も見るものである。統治者の王冠には三日月の絵が明らかに見える。イスラム時代に於いても三日月や八芒星の聖礼の意味が保たれた。例えば、ナヒチェバンにあるモミネ・ハトゥン御陵（12世紀）の壁では内側にアッラーと書かれている八芒星の画像がある。三日月と星はその後、装飾美術でしばしば発見し、普遍的なものとなる。

1920年4月に占領された結果として、アゼルバイジャン民主共和国が崩壊してしまい、アゼルバイジャンでソビエト政権が成立した。国会体制や独立性の全てのアトリビュートが廃止され、その代わりにアゼルバイジャン人に他所のソビエトのシンボルが強制されたのである。

20世紀の80年代後半には



アゼルバイジャン共和国の時期の国旗表記のある切符

民族解放運動が開始され、そのシンボルとしては当然のとおりにアゼルバイジャン民主共和国の3色旗が採択された。1990年11月17日ナヒチェバン自治共和国の最高会議の第一セッションに於いてアゼルバイジャン民主共和国の旗が自立性の国旗として採用された。1990年11月29日に「アゼルバイジャン・ソビエト社会主義共和国の国名・国旗の変更について」の法令が発行され、1991年2月5日に議会によって批准された。1995年11月12日に国民投票で独立したアゼルバイジャン共和国の最初の憲法が採択され、その第23条に三色の国旗の説明が入っている。

国旗を推進・宣伝することは幾つの公式文書の対象となっている。1998年3月13日に「アゼルバイジャン共和国の属性関連研究強化について」の大統領令が出される。その中では、「我々の市民、とり



わけ我々の青年は国家属性へ深く尊敬するように教養することが直接的に社会での愛国心を強化するのに役立つ」と強調されている。2004年6月8日付け「アゼルバイジャン共和国の国旗の扱い方について」の大統領令が国旗を扱う形と場合を調節している。2006年2月7日「アゼルバイジャン共和国大統領附属の紋章評議会樹立について」の大統領令が発令された。2007年11月17日「アゼルバイジャン共和国首都バクーにて国旗広場建設について」の大統領令が出た。従い、バイル岬に於いて2平方メートルの面性が割り当てられ、そこに2010年9月1日に国旗広場のグランドオープン式が行われ、アゼルバイジャンの国旗が掲揚された。その旗葉は世界一高いものとなった。広場は面積60ヘクタールを占めている。旗葉の高さが162メートル、基底の直径が3.2メートル、上部の直径が1.09メートルとなる。旗葉の総重量が220ト

ン、旗の幅が35メートル、長さが70メートル、量が350キログラムである。

2008年9月15日、「アゼルバイジャン共和国大統領軍旗について」の大統領令が出され、国旗の色合いが軍旗の色として確認された。2009年11月17日「アゼルバイジャン共和国の国旗記念日樹立について」の大統領令が発令された。従って、11月9日が国旗記念日として祝われている。その大統領令は、我々の三色の国旗のアゼルバイジャン人にとっての意義を明らかにしている。「アゼルバイジャン民主共和国の記念として、この旗は我々の自由、国民的・世界的な価値観へ忠誠心を示しているのである」。

#### 参考文献：

1 Похлебкин В.В. Международная символика и эмблематика. М., 1989, с.9. (V. V. ポフレブキン、『国際的なシンボルとエンブレム』、モスク

ワ、1989、9頁)

- 2 Флаги рассказывают, Л., 1972, с.5. (『旗が語る』、レニングラード、1972、5頁)
- 3 Вилинбахов Г.В.. Русские знамена. Очерки. Санкт Петербург, 2005, с.13. (G. V. ビリンバホフ、『ロシアの旗—論文集』、サントペテルブルク、2005、13頁)
- 4 НМИА Археологический Фонд инв. № АF 1174. (アゼルバイジャン国立博物館、考古学財団、目録№. АF 1174)
- 5 Форти С., Символы, Энциклопедия. Пер. с англ. Н.Гончарук, М.Почкина. М., 2005, с.7. (S. フォルティ、『シンボル。百科事典』、N. ゴンチャルук/M. ポチキン英訳、モスクワ、2005、7頁)
- 6 Похлебкин В.В. Международная символика и эмблематика, с.236. (V. V. ポフレブキン、『国際的なシンボルとエンブレム』、236頁)
- 7 Иванов К.А. Флаги государств мира. М., 1971, с.3-6. (K. A. イヴァノフ、『世界の各国の旗』、モスクワ、1971、3-6頁)
- 8 同上
- 9 Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti ensiklopediyası, c.I, s.158, 310  
アゼルバイジャン国立百科事典、第1章、158頁、310頁
- 10 Əliyev İ., Məhərrəmov E., Azərbaycan Respublikasının dövlət rəmzləri. Bakı, 2000, s. 10. (I. アリエフ、E. マハラモフ、『アゼルバイジャン共和国の象徴』、バクー、2000、10頁)
- 11 Mərdanov M., Quliyev Ə., Azərbaycan Respublikasının dövlət rəmzləri. Bakı, 2001, s.74-75 (M. マルダノフ、A. グリエフ、『アゼルバイジ



- ヤン共和国の象徴』、バクー、2001、74-75頁)
- 12 Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti (1918-1920). Parlament (stenoqrafik hesabat). Bakı, 1998, I cild, s.34 (アゼルバイジャン民主共和国(1918-1920)。議会(速記報告)、バクー、1998、第1章、34頁)
- 13 同上
- 14 Похлебкин В.В. Международная символика и эмблематика, с.236. (V. V. ポフレブキン、『国際的なシンボルとエンブレム』、236頁同上、76頁)
- 15 Государева Оружейная Палата. С-Пб., 2002, с.46-48, 136, 56, 140. (国立兵器庫、サンクトペテルブルク、2002、46-48、136、56、140頁)
- 16 Еремеев Д.Э. Этногенез тюрков. М., 1971, с.156 (D. イェレメエフ、『トルコ人の民族起源論』、モスクワ、1971、156頁)
- 17 Рол Девид. Генезис цивилизации. Откуда мы произошли. М., 2003, шяк.510, шяк.143; Виноградов А.Б. Тысячелетия, погребённые пустыней. М.,1966, с.29. Шейнина Е.Я. Энциклопедия символов, знаков, эмблем. М., 2006, с. 9. (ロル・デヴィド、『文明の起源。我々はどこから来たか』、モスクワ、2003、510/143 ; A. B. ヴィノグラドフ、『砂漠で埋もれた千年』、モスクワ、1966、29頁 ; E. Y. シェイニナ、『象徴の百科事典』、モスクワ、2006、9頁)
- 18 Аджи Мурад. Европа, тюрки, Великая степь. М., 1998, с.140. (Ажи・ムラド、『ヨーロッパ。テュルク民族、大草原』、モスクワ、1998、140頁)
- 19 Алекбер А. Азербайджан-это «страна света» // «Azərbaycan tarixinin problemləri, müasir tədris və elmi nəşrlərdə onların əksi» konfransın materialları, B.,1995, s. 9. (A. アレックベル、『アゼルバイジャン、「光の国」』、「アゼルバイジャン史の問題点、近代教育、科学刊行物での表示」会議集、バクー、1995、9頁)
- 20 Гулузаде Н. Ещё раз о культуре быка в Азербайджане // «Qafqazın arxeologiyası, texnologiyası, folkloru» beynəlxalq konfransın materialları, B., 2005, s.83-84 N. Голузаде、『アゼルバイジャンで牛の進行について』、「コーカサスの考古学、技術、伝承」国際会議のデータ、バクー、2005、83-84頁)